

海舟とすみだ

～墨田区に遺る勝海舟の足跡～

第3号

2026.07

海舟とすみだ 2026 VOL.3 令和8年7月発行

発行/海舟とすみだ編集部(東京都墨田区錦糸2-8-11 トウダレイビュ2F)〒135-0068 03-5608-1971



勝海舟顕彰会

Katsu Kaishu Memorial Association

平成十一年十一月、鶴澤義行日本大学名誉教授による「墨田区と勝海舟」についての講演がきっかけとなり、墨田区における勝海舟の銅像建立運動がはじまりました。

その後、「勝海舟の銅像を建てる会」が発足し、区議会議員・国会議員をはじめ数々の協力を得て、平成十五年七月二十一日、墨田区役所うるおい広場にて現在の勝海舟像の除幕式が執り行われました。

翌年二月、「勝海舟の銅像を建てる会」は解散しましたが、「今後も勝海舟の功績を語り継ぎ、その精神を継承していく」との思いから、「勝海舟顕彰会」が新たに発足しました。

毎年「海の日」には「海舟フォーラム」が墨田区で開催され、勝海舟の精神が語り継がれています。

【会長】廣田 健史 【実行委員長】長谷川 由美 【副実行委員長】久力 一雅 【役員】長岡 靖浩・平野 善彦・佐伯 彰一・渡邊 秀行・山口 千鶴子・大谷 浩一郎・下村 みどり・片山 真一・松田 丈史・猪越 太一・杉山 正純・後原 健・大塚 武敏 【顧問】高山 みな子 【相談役】板橋 幸幸・中川 圭造

【協力】東京向島ロータリークラブ・(公社)東京青年会議所墨田区委員会・本所防犯協会・日本大学校友会東京都第六支部・日本大学校友会墨田桜門会・向島消防少年団・(株)環境整備

目賀田種太郎没後百周年記念 総力特集号

墨田に生まれた

目賀田種太郎と海舟

HISTORIC SITES OF KATSU KAISHU IN SUMIDA



MEGATA TANETARO

総力特集

墨田に生まれた

目賀田種太郎と

海舟

正義の在る所 千古に存す

君見ずや、天地公明正大の氣

目賀田種太郎

2026
MEGATA
TANETARO
the 100th anniversary of the death
目賀田種太郎没後100周年

墨田区が生んだ偉人、目賀田種太郎は勝海舟の娘婿であり、専修大学や東京音楽学校（現東京藝術大学）の創設、近代税制の確立など、維新後の国づくりに奔走した人物です。没後100年の節目を迎える本年、激動の時代を駆け抜けた、その知られざる素顔に迫ります。



『海舟とすみだ』とは

幕末という激動の時代は、実に多くの英雄たちが歴史の舞台に現れました。中でもひととき異彩を放つ存在が幕臣・勝海舟です。西郷隆盛との「江戸城無血開城」は海舟の功績として広く知られています。注目すべきはそのやり取りや交渉術ではなく、幕末を通して貫かれた海舟の“人としての在り方”です。海舟は誠意と信念を胸に、幕府の要人から薩長の志士、さらには浪人に至るまで、立場を越えて交流し、心を通わせました。その姿勢が、やがて「無血開城」という歴史的な道へとつながったのです。

ではなぜ海舟は、これほど柔軟な行動ができたのでしょうか。その背景には、人情あふれる墨田の下町で生まれ育った日々があったのです。義理人情に厚い父・小吉の背中を見ながら、武士から町民、職人、農民らが一緒になって暮らす本所の下町の空気の中で、人とのつながりの本質を学びました。その精神こそが、海舟の人格の核となり、ついには歴史を動かす力となったのです。

また海舟の魅力のひとつで、時に批判を生む独特の毒舌も、本所に育った影響でしょうか。

本フリーペーパーでは、墨田に残る海舟の足跡をたどりながら、その人柄や精神の源を、知られざる逸話とともにご紹介していきます。

CONTENTS

02

総力特集

墨田に生まれた
目賀田種太郎と海舟

26

連載・墨田幕末明治グルメ

27

連載・海舟筆縁地図

28

連載・海舟の写真

29

SUMIDA MAP

企画・制作 海舟とすみだ 編集部
(サンピース・グラフィックス株式会社内)

編集長 三澤敏博

発行日 令和8年7月1日

発行 (サンピース・グラフィックス株式会社内)

東京都墨田区錦糸2-8-11 トウダアレイビル2F

TEL 03-5608-1971

<https://www.sun-piece.com>



Cover photo

報恩寺前

目賀田種太郎は報恩寺前にあった屋敷に生まれました。正確な跡地は特定できませんが、法恩寺は現在も当時と同じ場所に鎮座しています。報恩寺は大田道灌によって長禄二年（一四五八年）に開基され、豊臣秀吉や徳川家康も休憩に訪れたお寺です。

デザインの力で
墨田区を元気に。
サンピース・グラフィックス株式会社
www.sun-piece.com

没後一〇〇周年

墨田に生まれた海舟の娘婿

目賀田種太郎



法恩寺前に生まれた神童

嘉永六年（一八五三）六月、浦賀に黒船が姿を現し、幕末という激動の時代が幕を開けました。その翌月、七月二十一日、江戸本所太平町（現・墨田区太平）、法恩寺前の旗本の家に一人の赤子が産声を上げました。目賀田種太郎。後に「近代日本の設計図」を描くことになる男の運命は、まさに激動する国家の夜明けとともに、はじまりました。

黒船来航の翌年、さらに日本中を混乱させたのが安政の大地震です。安政二年（一八五五）には江戸を襲い、当時三歳であった種太郎の邸宅も大破しました。

種太郎は幼い頃より神童と称される程に優秀だったと伝わります。五歳の頃から漢学を学び始めると、八歳にして『四書五経』の素読を終え、同時に『南総里見八犬伝』などの物語類にも読み耽る、知的好奇心に溢れた少年でした。

ところが文久元年（一八六一）、九歳の時に父が病没。

幼い身で六百九十一石余の知行を継ぎ、家督を相続することになります。本所から下谷練堀小路（現・千代田区神田練堀町）へと移り住み、若くして莫大な借金や領地管理という過酷な現実を背負っていくのですが、種太郎は向学心を失いませんでした。湯島の昌平黉で漢学を修めつつ、幕府の開成所にも入学して、英語や数学という新時代の学問を吸収していったのです。

慶応二年（一八六六）八月、その才を見込まれて海軍奉行並の支配を命ぜられますが、翌年の「大政奉還」から「王政復古の大号令」により徳川幕府は廃止。旧幕臣たちは激しい時代の波に飲まれていきます。

そして慶応四年（一八六八）に戊辰戦争が勃発し、江戸は勝海舟らの奔走によって無血開城に。徳川家は駿府藩として静岡へ移封となり、海舟や種太郎らもこれに随従して静岡へと移住しました。

ハーバード大学で法律を学ぶ

新天地でも種太郎の才能は埋もれませんでした。明

本所に生まれた目賀田種太郎

目賀田種太郎は嘉永六年七月二十一日、江戸本所太平町の法恩寺前横町（現在の墨田区太平一丁目）の屋敷で生まれました。広さ二百二坪の屋敷は、三歳の頃に起きた「安政の大地震」で大きな被害を受けたと伝わります。さらに六年後の文久元年、父が三十九歳の若さで病没し、種太郎はわずか九歳で家督を継ぐこととなりました。これに伴い、本所の屋敷は幕府表御右筆の丸橋銈之丞に賃貸し、種太郎の一家は下谷練堀小路（現在の秋葉原駅北東周辺）に移りました。その後、幕府の瓦解により、種太郎の一家が本所に戻ることはありませんでしたが、幼少期より「神童」と称された種太郎の基礎は、本所の地で築かれたのです。



現在の法恩寺前（写真左）。種太郎は法恩寺前の屋敷に生まれた。「本所總繪圖（明和元年）」に描かれた法恩寺（写真右）周辺。

慶応四年（1868）三月

目賀田種太郎家臣・吉川源兵衛
松沢十左衛門宛 申渡状 編集部蔵

表

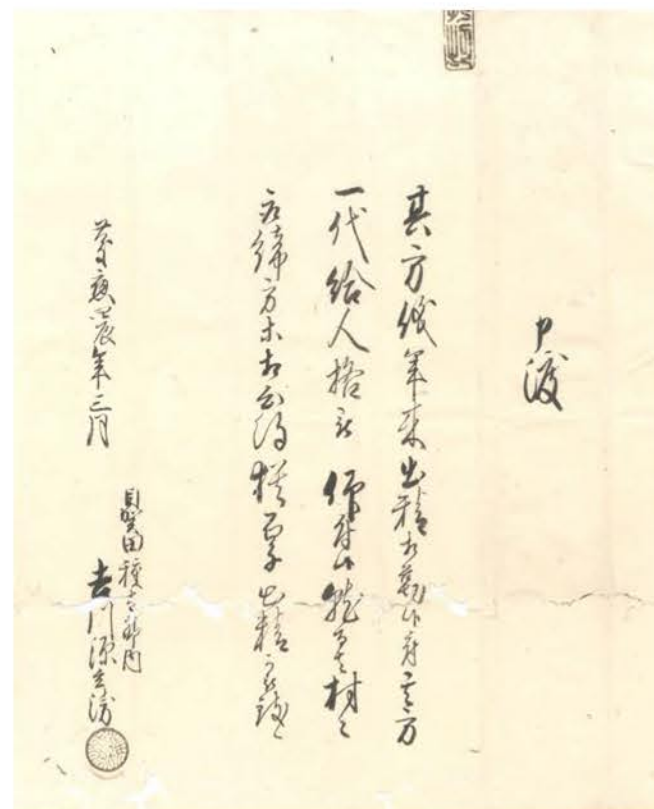
申渡

其方儀、歳来出精相勤候ニ付、其方一代給人格被 仰付候、就而者、村々取締方等相心得、猶厚出精可被致候、慶應四辰年三月

目賀田種太郎内 吉川源兵衛(印)

裏

表書之通相違無之もの也、
種太郎(印)



海舟と西郷の談判により江戸城の無血開城が決定した、慶応四年三月。まさにその激動の最中に書かれたのが、この申渡状です。目賀田種太郎の家臣・吉川源兵衛から、松沢十左衛門に宛てられたもので、百姓だった十左衛門に対し、一代に限り「給人格」という武士身分を与える、という内容です。

種太郎は文久元年、父と死別し、わずか九歳で武蔵国埼玉郡の台村・下手子林村・今泉村・下三ヶ谷村、上野国邑楽郡野辺村・石打村、以上六百九十一石余の領知を相続しました。松沢十左衛門は、領地・野辺村の名主だと見られます。

この申渡状が出されたのが、無血開城決定の前後いつ頃のものかは定かではありませんが、いずれにせよ旧幕府の崩壊という混乱期に出されたものです。当時、わずか十六歳の種太郎は、どのような想いでこの身分を与えたのでしょうか。若き当主の覚悟に、様々な想像が

治二年、十六歳の種太郎は、当時最高学府とされた駿府藩の「静岡学問所」で英学世話心得を経て五等教授に大抜擢されます。さらに翌年には上京して大学南校（東京大学の前身）に入学。そして同年夏、国費留学生に選拔され、アメリカへの切符を掴むのです。

サンフランシスコに上陸した種太郎は、ニューヨークを経てトロイやボストン郊外で予備教育を受けた後、明治五年、名門ハーバード大学に入学します。法学を専攻しながらも、雄弁術や古典語まで幅広く研究する猛烈な留学生を送りました。

専修大学の設立と、海舟の娘・逸との結婚

明治七年に卒業・帰国して文部省に出仕すると、翌年には留学生監督として再び渡米します。

アメリカの教育制度を实地調査する傍ら、現地で相馬永胤らと「日本法律会社」を結成し、法律研究を深めます。そして帰国後の明治十二年、種太郎は相馬と京橋区に共同法律事務所を開設しました。

かくして明治十三年九月、留学中からの同志である相馬永胤、田尻稻次郎、駒井重格らとともに、念願であった法学、経済学を教える「専修学校（専修大学の前身）」を開校します。種太郎が勝海舟の三女・逸と結婚したのは、まさにこの開校のわずか三ヶ月前のこと。当時二十八歳、この年は種太郎にとって人生の大きな転換点でした。

また、再渡米の際にアメリカの音楽教育の実態を調

ス・ジュネヴで開催された国際連盟第一回総会において、英・仏・伊と並ぶ常任理事国・日本の代表という大役を果たしました。

大正十二年に国家の最高諮問機関である枢密顧問官に就任。そして大正十五年九月十日、逝去のその日、生前の功績に対し特旨をもって正三位・旭日大綬章が授与され、七十四年の激動の生涯を閉じました。黒船来航の年にはじまったその歩みは、大正の終わりと共に静かに幕を下ろしたのです。

目賀田種太郎の功績は、革命や戦場での功名といっ

査していた種太郎は、文部省へ数々の提言を行い、音楽教師メーソンの招聘に尽力しました。これが後の東京音楽学校（現・東京藝術大学）設立へと繋がります。

大蔵官僚として日本の財政を支える

明治十六年、大蔵省に入省し、種太郎の官僚としての本格的なキャリアが幕を開けました。

西南戦争によるインフレを抑制し、財政の立て直しを目指す松方正義大蔵卿のもと、種太郎も奔走。地租や酒造税、醤油税などの国内税務の整備に辣腕を振るいました。

明治二十四年に横浜税関長、日清戦争が勃発した明治二十七年には主税局長に就任。以後、明治三十七年に韓国財政顧問に就任するまでの十年間、条約改正に向けた関税制度の調査や、タバコ専売制の確立など、数々の税制の新設・改正を断行しました。日清・日露戦争へと連なる、国家の存亡を賭けた軍備拡張の時代背景の中、強靱な税収基盤を作り上げました。

国連総会に出席

その後、韓国財政顧問として同国の財政改革に尽力し、男爵に叙せられた種太郎の目は、さらに広く世界へと向けられていました。

日露協会や日波（日本・ポーランド）協会の要職を務め、ハルビンに日露協会学校を開設するなど、民間外交や国際協調にも情熱を注ぎました。大正九年には、スイ

た劇的で華々しい類のものではありません。それは今日、当たり前に享受している「近代国家」という名の揺るぎない基盤そのものといえます。その生涯を辿れば、未知の領域を切り拓き、文明の夜明けを導き続けた、不屈の足跡が見えてきます。

維新後の徳川宗家を継いだ徳川家達は、種太郎を「識見高邁、経綸雄大」と評しました。「見識は気高く優れ、国家を治める計略は雄大である」。この言葉こそが、目賀田種太郎という人物の真価を端的に象徴しています。

目賀田種太郎年表

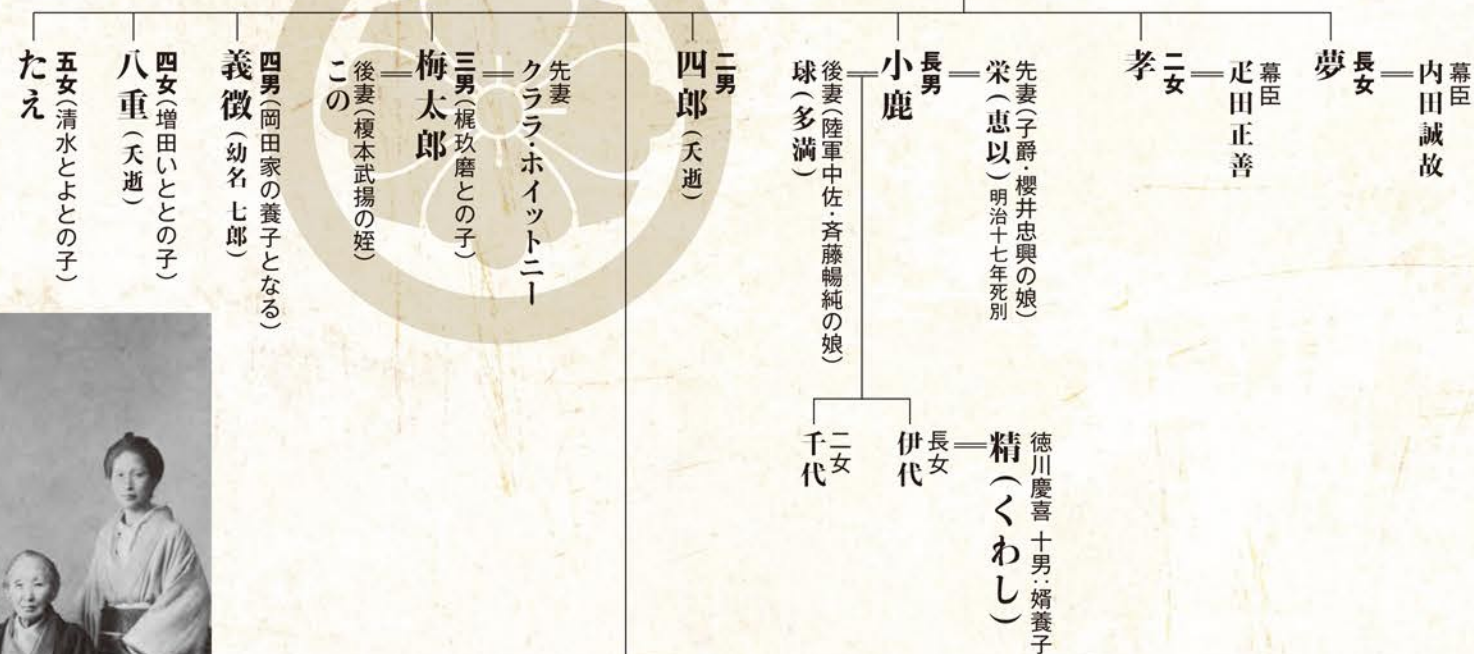
嘉永6年（1853）	1歳
本所太平町に生まれる。	
文久元年（1861）	9歳
父死去、家督相続。	
昌平黌・開成所で学ぶ。	
明治2年（1869）	17歳
アメリカ留学	
ハーバード大学で法律を学ぶ。	
明治7年（1874）	22歳
ハーバード大学卒業、帰国。	
文部省に出仕。	
明治8年（1875）	23歳
留学生監督として再度渡米。	
明治12年帰国。	
明治13年（1880）	28歳
専修学校を創設。	
海舟の三女・逸と結婚。	
明治14年（1881）	29歳
判事に任官。	
明治16年（1883）	31歳
大蔵省に入り、財政官僚として活躍。	
明治27年（1894）	42歳
主税局長に就任、財政の中枢を担う。	
明治30年（1897）	45歳
足尾鉾毒事件の調査委員を務める。	
明治36年（1903）	51歳
貴族院議員、韓国財政顧問となる。	
明治39年（1906）	54歳
男爵を授けられる。	
大正6年（1917）	65歳
政府特派の財政経済委員長として渡米。	
大正9年（1920）	68歳
国際連盟会議（ジュネーブ）日本代表。	
大正15年（1926）	74歳
死去。正三位・旭日大綬章を追贈。	



【写真上】留学中、アメリカで撮影された写真。左より目賀田録（種太郎の妹）・目賀田種太郎・外国人婦人・松本荘一郎。（大垣市奥の細道むすびの地記念館蔵）
【写真左下】左より松本荘一郎・目賀田録（種太郎の妹）・目賀田種太郎。録は種太郎とともに渡米し、アメリカで松本と知り合った。帰国後の明治十年、松本と録は結婚。（大垣市奥の細道むすびの地記念館蔵）
【写真右下】録と種太郎（大垣市奥の細道むすびの地記念館蔵）

民

勝海舟



目賀田夫妻 (大正6年「讀賣新聞」より)

大納言道綱の次男
目賀田山 (後の安土山) を拓く
道忠

目賀田種太郎家初代
目賀田信忠

秀保
目賀田城主・佐々木氏頼の旗頭

貞政
織田信長家臣

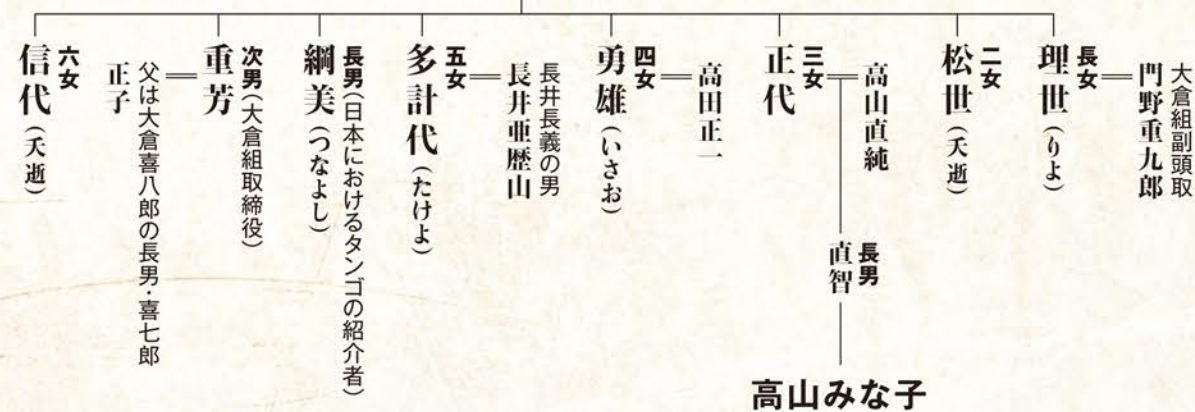
堅政
最後の目賀田城主

守政
紀州徳川家に仕官

守威
吉宗に従いに江戸へ

守文

目賀田種太郎



海舟の妻・民と娘たち

前列左から
三女・目賀田逸、妻・民、
後列左から
長女・内田夢、二女・正田孝。
(高山みな子氏蔵)

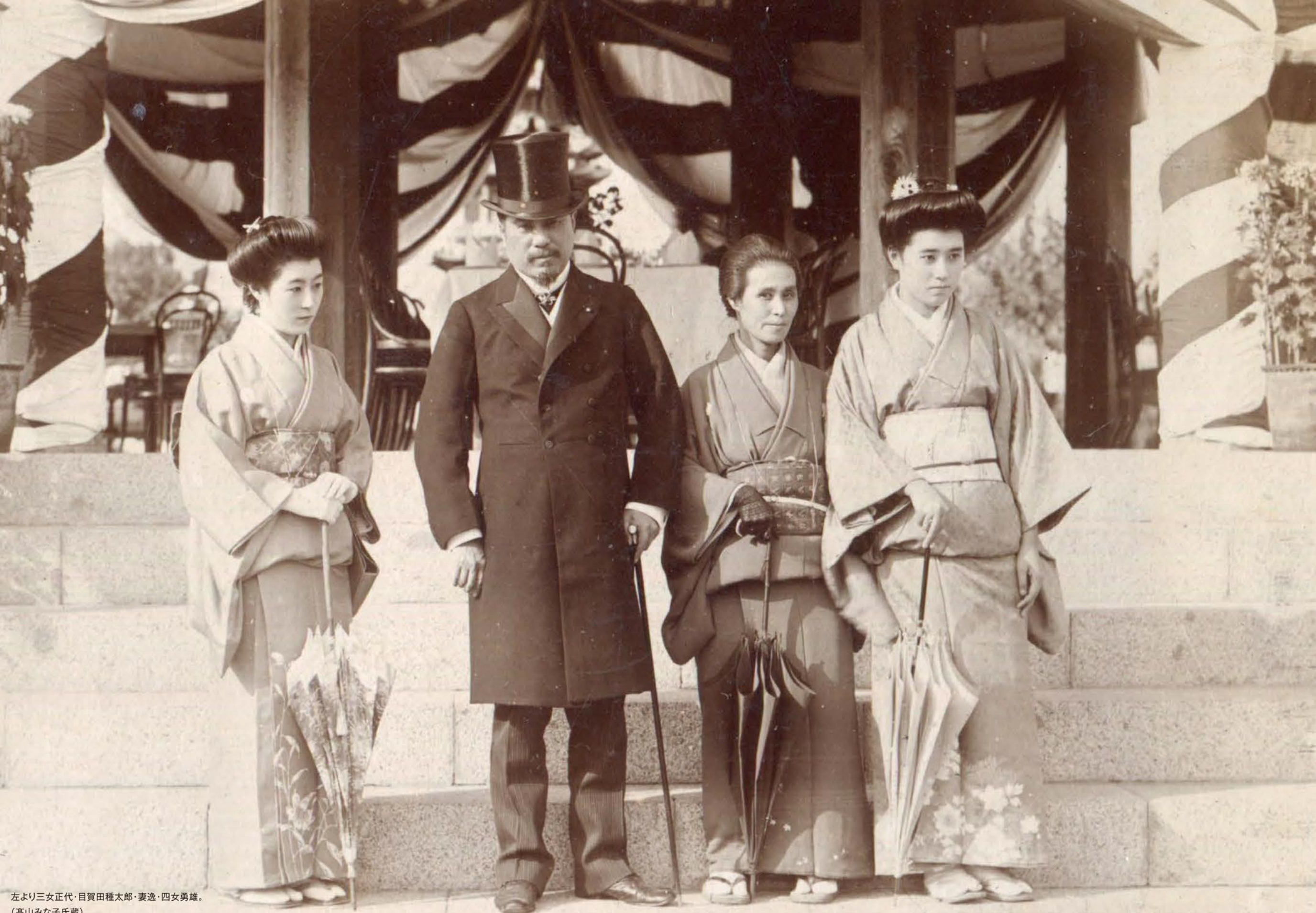
三女 (増田いととの子)

逸



勝海舟・目賀田種太郎系図

FAMILY TREE OF KATSU KAISHU AND MEGATA TANETARO



左より三女正代・目賀田種太郎・妻逸・四女勇雄。
(高山みな子氏蔵)

現在の安土城跡。もとは「目賀田山」と呼ばれる目賀田家の領地でした。織田信長の求めに応じて先祖伝来の土地を譲ったことで、この地に天下の名城が誕生しました。

START

ルーツは藤原鎌足！
京都から近江国へ

目賀田家の先祖は大化の改新で活躍したあの藤原鎌足！
平安時代に藤原道綱の子・道忠が近江国(滋賀県)へ移り「目賀田山」を拓いて住みました。

1

「目賀田」のはじまり

先祖代々暮らした地名から、初めて「目賀田」を名乗ったのは道忠の孫・信忠です。
この信忠が目賀田種太郎家の初代となります。

3

名門・六角氏を支える「六家老」のひとり！

室町～戦国時代には、近江の大名・六角定頼の「六家老」の一人として勢力を誇りました。

2

南北朝の動乱！
足利尊氏とともに戦う

時は鎌倉時代から南北朝時代へ。鎌倉幕府を打倒すべく元弘の乱が勃発。目賀田氏は足利尊氏に従い、数々の戦功を重ねて室町幕府成立に貢献しました。

4

織田信長の傘下に。
目賀田山に安土城が築城！

六角氏は織田信長に滅ぼされ、目賀田氏は信長の家臣に。
信長は目賀田山を「安土山」と改め、かの有名な安土城を築きました。

5

本能寺の変で大ピンチ！
秀吉の時代へ

本能寺の変で信長が敗れ、秀吉の時代に。目賀田氏は明智光秀に組したことから、秀吉の怒りを買って、領地没収。ついには「浪人」に……

7

紀州徳川家へ！
和歌山での再出発

目賀田氏の娘が加藤清正に嫁ぎ、またその娘が家康の十男・頼宣(初代紀州藩主)と結婚！
目賀田氏は紀州徳川家に仕え、再興を図っていきます。

6

様々な戦で活躍

佐和山城主・丹羽家や福山城主・水野家(家康の従弟)に身を寄せながら、文禄・慶長の役・大坂夏の陣・島原の乱などに参戦して、功績をあげます。

8

吉宗に仕え、江戸へ！
將軍家重を出産！！

紀州藩主・徳川吉宗に従って江戸へ移ります。翌年、吉宗は八代將軍に！ また吉宗との間に九代將軍・家重を生んだお須磨の方も、目賀田家の女性でした！

9

目賀田家復興！！
幕府を支える「旗本」に

かくして目賀田家は復興し、幕臣旗本として武蔵国(現在の埼玉周辺)などを治めました。

GOAL

そして、
種太郎誕生！

幕末の嘉永六年、本所の地に一人の男の子が誕生。
わずか九歳で当主となったこの少年こそが「目賀田種太郎」です！

時空を超えた歴史パノラマ。目賀田種太郎のルーツを探訪

目賀田家歴史双六

ルーツは藤原鎌足！ 信長に「安土城」の土地を譲り、吉宗とともに江戸の本所へ——。
日本史の教科書のような目賀田家・千年のドラマチックな歩みを、すごろくで巡ります。

目賀田種太郎が海舟の三女・逸と結婚したのは明治十三年六月十九日のことです。その馴れ初めには、次のような逸話が伝わっています。

ある日、神鞭知常が富田鉄之助の宴席に招かれました。神鞭と種太郎は、アメリカ留学の際に出会った仲間です。また富田は幕末期、海舟の塾「氷解塾」に学んだ人物です。

宴席で席を取り仕切る逸の見事な立ち居振る舞いに感心した神鞭は、友人である種太郎との縁組を思いつきました。話を聞いた種太郎も心を動かされた様子で、神鞭は早速、面識もない海舟の屋敷を訪ねました。ところが、突然「嫁をくれ」と頼んでも、全く取り合ってもらえません。そこで富田が間に入り、改めて縁談

を取り持つことになりました。

海舟は種太郎の人となりを詳しく聞くうちに興味を持ち、面会することになりました。実際に顔を合わせた二人は、縁談の話も忘れて語り合い、大いに意気投合したそうです。

かくして神鞭が媒酌人となり、赤坂の八百勘で祝宴が開かれました。しかし当日になっても種太郎側の客がなかなか集まりません。実は多忙のあまり、種太郎は招待状の手配を失念していたといいます。急ぎ人を集め、何とか五十名ほどでようやく式を整えたと伝わっています。

この逸話の真偽は定かではありませんが、以後、種太郎は海舟の身内として深く関わるようになり、海舟の日記にも頻出するようになります。

墨田に生まれた、二人の交差点

種太郎と海舟

勝海舟の三女・逸と結婚した目賀田種太郎。これを機に、種太郎と海舟は生涯にわたり強い絆で結ばれました。種太郎は事あるごとに海舟に教えを乞い、海舟も勝家の困難には常に種太郎を頼りとなりました。単なる娘婿の関係を超え、海舟が厚い信頼を寄せた二人の、温かい交流の軌跡を紐解きます。

種太郎の頼もしき父

大蔵官僚として忙しい日々を過ごすようになって、種太郎は赤坂氷川の間でたびたび訪ねました。折々の挨拶はもちろん、様々な相談を持ちかけることもあり、種太郎にとって海舟は、もともと頼りになる「父」でした。

結婚から三か月後、種太郎は専修学校を創設して、その運営に尽力。翌年には判事にも任じられました。明治十五年に辞職する際には海舟にも相談していたことが、『海舟日記』に記されています。

また後年の明治三十年、足尾鉾毒事件の調査委員に選ばれた際にも、種太郎は海舟に意見を求めました。当時、海舟は鉾毒事件に対し「直ち

に停止するほかない」と明快な見解を示しており、巖本善治のインタ

ビューでも「先達つて、大蔵の目賀田が来た時に、あれはどうしませうと言ふから、今となってどうなるものかと言った。然し、田中は大丈夫の男で、アレは善い奴ぢやといふだけ言つて置いた」と語っています。ここに出てくる田中とは、鉾毒事件の解決に奔走した田中正造です。

海舟が頼りにした息子

一方で、海舟が目賀田家を訪れることも少なくありませんでした。明治二十二年の日記には「目賀田婆々病死の知らせ、同宅へ行く、香奠百円遣わす」といった記述などもあり、こうした往来からも、両者の深い関係がうかがえます。種太郎が海舟を

「父」と慕うと同様に、海舟も種太郎を「息子」のように頼りにしていました。実はその背景には嫡男・小鹿の健康不安もあったようです。

小鹿は明治十三年に結婚したものの、翌年には体調悪化により、職を辞するほど病状が深刻でした。看病に尽くした妻・栄も明治十七年に病没し、その葬儀では種太郎が代理で喪主を務めています。

さらに明治二十五年、小鹿自身が亡くなった際も、やはり種太郎が喪主を担いました。他の親族もいる中で、これらの役割を託されたことから、種太郎への厚い信頼がうかがえます。

維新後の勝家における大きな出来事の二つが、クララの懐妊問題です。

商法講習所の教師としてアメリカより来日したホイットニー家は、同所から退所後、海舟邸の敷地内に住みました。ホイットニー家の長女・クララと逸は同年で、二人は親友になるのですが、一度帰国している間に逸は結婚。クララは再来日後も海舟邸に住む中で、海舟の三男・梅太郎の子を身こもり、国際結婚に至りました。この問題の調整にも種太郎が深く関わっていたことが、海舟の日記から読み取れます。

四月九日の日記に「目賀田、梅太郎の事につき内話とあるように、海舟は種太郎からクララの懐妊を聞かされたようです。クララが親友の逸に相談したのかもしれませんが、種太郎らの助言により、二人は海舟が管

理していた徳川家の別荘・木下川梅屋敷で暮らすこととなりました。嫡男の病死や三男をめぐる懐妊問題と、勝家にとっての重大事件に、種太郎は欠かせない存在だったのです。

海舟の遺志を継いで

こうした二連の出来事において、種太郎は常に勝家を支える存在であり続け、両者の結びつきは、単なる娘婿以上の関係でした。

海舟は明治二十三年、種太郎が創設した専修学校の卒業生に向けて書も贈っています。

種太郎と逸の間に生まれた子どもたちの名付け親も海舟です。「勇雄」など、女子の名前にさえも力強さを宿らせたその命名は、激動の時

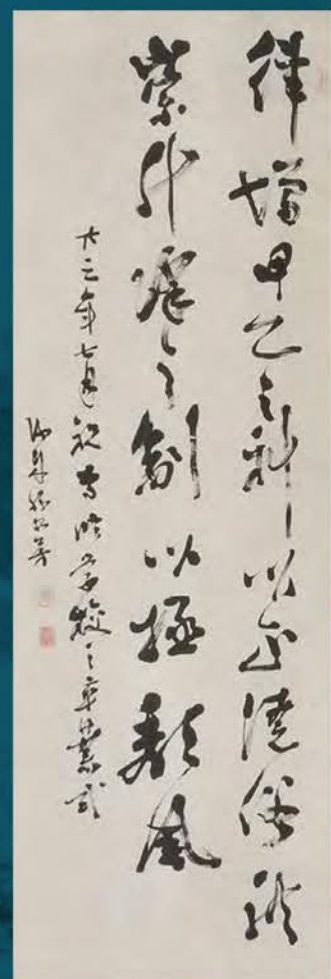
代を生き抜いた海舟が、次代を担う孫たちに託した願いだったのでしょうか。

明治三十二年一月十九日、海舟が亡くなった日、その急変はただちに種太郎にも伝えられました。葬儀に際しては家督と爵位の問題が浮上しますが、やはり種太郎が奔走し、伊藤博文らと協議の上、最終的に明治天皇の判断を仰ぐことで解決へと導きました。

そして二月二十五日、大雪に覆われた道を、海舟の棺が赤坂から青山葬儀場へと運ばれました。およそ二千人の会葬者が見守る中、種太郎は喪主・精のすぐ後ろに付き従い、一歩ずつ頼もしき「父」との別れの歩を進めていきました。

海舟の没後、海軍大臣の山本権兵衛によつて海舟の銅像建立が計画されましたが、種太郎は「海舟が生前、銅像などを好んでいなかった」と、この申し出を断りました。形式的な記念碑よりも海舟の遺志を重んじたことのような振る舞いにも、近くで海舟を支え続けた種太郎の、深く強い想いが表れているようです。

専修学校卒業生に贈った海舟の書。「法律と道徳が交わって、悪しき風俗を正す」との想いを海舟は卒業生に贈った。(専修大学蔵)



椅子に座っているのが幼少期の逸。左は姉の孝[海舟次女]
(名古屋市博物館蔵)

坂本龍馬に 肩車

親友はアメリカ人

クララ・ホイットニーの日記より
「勝家のお逸が今日十二時に来た。かわいい優しい少女で、私は同国人の友達のように大好きだ。丸顔で日本人にしては大きないたすらっぽい黒い目をした美少女で、十六歳だが日本では若い淑女なので、結婚の申し込みがたくさんある。でも結婚などしてはいけない！(へもし)できたらアメリカへ連れて帰りたい。近いうちに泊まりに来ることになっているが、本当に大好きだ！」

海舟の三女

逸

MEGATA ITSU

1860.09.17-1947.12.09
万延元年8月3日～昭和22年12月9日

貴婦人界の 青竹組

青竹をすっぱり割ったような姿と性格から、大山巖夫人・捨松・後藤新平夫人・和子とともに「貴婦人会の青竹組」と言われた

男爵夫人

明治十三年、目賀田種太郎と結婚

神山復生病院同情会設立

愛国婦人会理事
婦人平和協会などに参加
社会慈善活動を支援

草鞋で富士登山

「富士を始め、高野、六甲、摩耶、榛名などの山々に登りました。」

自由教育

「宅の児は皆物心つく頃から一切自分の身の廻りは自分でする事にして、女中の手を借らず曲りなりに、獨りで帯を結ばせます。」

木登り名人

質素儉約

「お雛様といふものを飾ったことはありません。娘等が『なぜ家ではお雛様を飾らないの』と申しますと『お前達が皆お雛様です。』」

素っ裸で海水浴

若い時、加納治五郎夫人と二人、大磯の海へ素裸で入って居る處を、通行人に見られて上陸すること出来ず、人の居無くなるまで海中に隠れて居た

戊辰戦争から

日清・日露、そして

第二次大戦までを体験

七十八歳で飛行遊覧

「こんな面白く愉快なものはありませんよ」

勝海舟の三女・逸は、海舟が咸臨丸での渡米から帰国して約三ヶ月後の万延元年(一八六〇)八月三日、女中であつた増田糸を母として生を受けました。

帰国後の海舟は多忙を極め、過激な攘夷派に命を狙われる危険と隣り合わせの日々を送っていましたが、身分を問わず多くの人々と交流を深めました。この頃に門下生となつた坂本龍馬に、幼い逸が肩車をしてもらつたという微笑ましい逸話が、今も子孫に語り継がれています。

やがて時代は大政奉還、王政復古から戊辰戦争へと大きく転換します。海舟は西郷隆盛との会談を経て「江戸無血開城」を成し遂げますが、一部の旧幕臣からは「裏切り者」とそしられました。それでも己の信念を貫く父の姿は、当時八歳だった逸の目に深く焼き付いたことでしょう。上野で彰義隊の戦いが起きた際には、父の留守中に新政府軍が屋敷へ乱入し、肝を冷やす経験もしています。

その後、徳川家に従い静岡へ移住した二家は、明治五年に帰京。三年後、十六歳になった逸は商法講習所の教師として来日したホイットニー家の娘・クララと大親友になります。二人は同年、勝邸の別棟にホイットニー家が移り住んでからはさらに親交を深め、敬虔なクリスチャンであるクララの思想やアメリカの自

由な価値観は、青春時代の逸に多大な影響を与えました。

そして明治十三年、二十歳の逸は目賀田種太郎と結ばれ、日光へ新婚旅行に出かけます。大蔵省の財務官俥として奔走する夫を献身的に支えた内助の功もあり、明治三十九年に種太郎は男爵を受爵しました。しかし、男爵夫人となつても逸は氣取ることなく、「女子富士登山の先達」「木登りの名人」と呼ばれるほど活発な女性でした。その痛快で飾らない気性は度々新聞を賑わせ、「貴婦人界の青竹組」と称されたほどです。

さらに、日本最古のハンセン病療養所「神山復生病院」を支援する同情会の結成や、愛国婦人会の理事を務めるなど、社会貢献や慈善活動にも惜しみなく尽力しました。

逸がその生涯を閉じたのは、第二次世界大戦後の昭和二十二年十二月七日です。幕府崩壊により一度は「敗者」となりながらも、何もかもが新しく生まれ変わる明治という時代の高揚感、近代日本が大国として世界へ羽ばたく過程、そしてその果てに訪れた重く苦しい敗戦——。旧幕臣・勝海舟の娘として、また目賀田男爵の妻として、歴史の「最前線」で激動の近代史のすべてを体験した逸。どんな時も明るく、たくましく生きた逸の目には、この数奇な日本の歩みは一体どのように映っていたのでしょうか。

特別企画

勝海舟玄孫・目賀田種太郎ひ孫 高山みな子氏インタビュー

ご子孫に聞く

海舟と種太郎



海舟の玄孫であり、目賀田種太郎のひ孫でもある高山みな子氏に特別インタビュー。家族に受け継がれてきた記憶や逸話を通して、歴史書だけでは見えてこない二人の素顔に迫ります。ご子孫だからこそ語ることのできる貴重なお話とともに、高山氏ご自身が抱く歴史への想いについてもうかがいました。

高山さんは勝海舟の玄孫(孫の孫)として、講演会などのご活動をされていますが、勝海舟の血筋であることを、意識されるようになったのはいつ頃からですか？

小学校五年生が六年生のころ、歴史の授業で咸臨丸が渡米したことを教わりました。それを家に帰って母に話すと、艦長の勝海舟はあなたのひいひいおじいさまと言われました。教科書に載っている人が先祖とは全くピンとこなかったのか、へえそうなのか、

でそれぎり忘れしました。

その後四〇歳過ぎて咸臨丸の乗組員の子孫の集まりに行くようになり、皆さん、とてもよくご先祖様のことをご存じだったので、私も勉強しないと、思うようになりました。

幼少期に聞いた印象的なエピソードなどはありますか？

私の子どもの頃、祖母(海舟の孫で目賀田種太郎と逸の三女)が海舟はこわいおじいさんだった、と申しておりまして。



祖母・正代氏。海舟の孫で目賀田種太郎と逸の三女。(高山みな子氏蔵)

海舟が外出先から帰宅すると皆が玄関の前にずらっと並んで頭を下げる。海舟が通り過ぎるまで顔をあげてはいけなかったで、顔より足の方をよく

覚えていて、と聞き、大変だったんだなあと、思った記憶があります。

海舟の気質(人間性・交渉力など)は受け継がれていると感じますか？
来る人は拒まず、去る者追わず、人の自由や考えに竿を刺さないところは受け継いでいるかもしれません。

目賀田種太郎とは具体的に、どのような繋がりになるのですか？

高祖父・海舟の三女の逸が私の曾祖母にあたり、逸が目賀田種太郎に嫁ぎました。(※7頁参照)

つまり種太郎は私の曾祖父です。逸と種太郎の三女が私の祖母です。

勝海舟とのことはよく聞かれると思いますが、目賀田種太郎のご子孫として意識されることはありますか？

普段は目賀田種太郎の子孫として意識することはあまりありません。時々煙草を吸っている人を見ると、煙草の専売制度を始めるために頑張ったんだなあと思うこともあります。

『朝日新聞』(明治四十四年十月十八日)

故 勝海舟伯の令嬢で、貴族院議員男爵目賀田種太郎氏の夫人逸子の方は、今の貴婦人社會に在つて、最も蠻カラの色彩に富んだ一人として、自分でも任じて居られるし、世間でも認めて居る。

男爵夫人と云へば、お出入は馬車か自動車か、風にも雨にも堪へ難なの艶女のように思へるが、目賀田夫人は赤ら顔の眼が大きく、平生着と云つたらお粗末極まるもの、海舟伯の氣性を享けてか、淡泊で洒脱でキビキビして、恰も竹を割つた様なお方である。

『婦人週報』(大正五年)

或 人が目賀田家を訪れて、「御免なさい」と声をかけても應ずる音がしないので、尚も大きく「御免なさい」といふと、近くの中天から「ハイ」といふ返事があつた。振り向いて上を見ると、向ふの高い樹に夫人が登つておられたのである。「女の木登り、見たことない」といふ俚謡もある如く、容易に見られない現象を目賀田男爵夫人逸



子さんにこれを見た次第である。それほど逸子さんは奇抜な飄逸な性格を持つておられる。斯る點だけでも勝海舟の愛嬢たるに恥ぢざる次第である。逸子さんは旅行好きを以つて有名である。女子富士登山會の先達として世に知られてゐる。少し奇麗な着物を着て夫人を訪れる婦人があると、「ばかに奇麗な装をしてゐるではないか。その衣物は幾れ位ぬかかかるのか」と来る。「いくら～です」と答へると、夫人は目を丸くして、「私なら、それだけの金で旅行をするがな」と答へられる。それほど夫人は質

素な方であると同時に、旅行癖を持つておられる。旅行癖と同時に夫人の特徴は、慈善癖であらう。慈善もいやいやでやつては面白くないそれが一種の癖となり、道樂となつて、初めてそこに面白味が感ぜられる。義務といふ文字はあまり堅苦しくつて、其處に何等の興味もないやうであるが、決してさうではあるまい。忠孝といふやうな義務でも、言ふに言はれぬ、いやいや仕方なしでやるやうでは、眞實の忠孝ではない。慈善にした所で、呉れてやつた金をいつまでも覚えてゐて、時々夢に見るやうで

は面白くない。そこに微妙な興味が湧然として生ずるやうでなくては、慈善の三昧に入つたのではない。逸子さんは其點に於て申し分のない慈善家である。慈善をなすために零碎の金を貯へられる其の苦心談はたくさんある。今日の男女は口では甘いことを云ふがその眞情は五割、七割引き位に見て差し支へない逸子さんは心に泣いて居ても、口には時に憎まれ口を利くと云ふ風でその好意を實行する迄は、素振りにも見せぬ方である。従つて近寄れば寄る程清節人

を慕はしむるものがある。或る英國人が夫人を評して『目賀田さんはハイカラです』と言はれたが、また一方夫人に於てほんとうの武士的魄の最後の遺物を見ることが出来る。然も逸子さんは家庭にありては、良き妻であり、賢い母である。令嬢達を教育なさるにも、一種獨特の教育法を用ゐられたらしい。されば其の令嬢達は皆母に似て面白い性格を持つておられるので、他の家庭に嫁いで、其處に清い純白な光彩を放つて居られる。

種太郎はどんな人物として語り継がれていますか？

種太郎は十九歳で政府の正規の留学生としてハーバード大学に留学したこと、専修大学の創立者の一人であること、現在の東京藝術大学の音楽部の創設に尽力したということは、聞いておりました。私も自分の子どもたちにはこの話くらいをしております。

ご自身が「目賀田家・海舟の家系だ」と感じる瞬間はありますか？

または「こういう考え方は先祖から来ている」と感じることはありますか？
質実剛健で派手な振る舞いはしないのが当たり前に行われてきたところは家系だと思います。

勝海舟について、家の中ではどのような語られていますか？

祖母が海舟は銀座木村屋さんのあんぱんが大好きだったと、嫁である母によく話していたと聞いております
私の家では思想的な話などを語り継いできたというのはありません。

海舟とその家族について、誤解されていると思うことはありますか？

海舟にはいわゆるお妾さんがおりまして、ですので、すぐ女好きと言われていると思います。

勝家はお目見え以下の格の低い武家ではありましたが、仮にも旗本です。世嗣の男子がいなければ家が取り潰されます。長男は三十九歳、次男は十四歳で亡くなるほど体が弱かったため、確実に後継ぎを作るためには、年上の妻の体力のこともあり、他の女性に産んでもらうしかなかったことを理解してもらえたらなと思います。

また目賀田種太郎については、家の中ではどのように語られていますか？

報告をするときに、まず結論から話すようにと言っていた、ということを知ったことがあります。

手紙や写真など特に大切にされている資料はありますか？

海舟が逸の長女の初節句のために書いた雛屏風があります。

た雛屏風があります。万葉集の山部赤人の長歌で、「あめつちの…」で始まる富士山の雄大さを表したものです。有名な反歌「田子の浦ゆうちいでて見れば真白にぞ富士の高嶺に雪は降りける」で書は締めくくられています。

私の昭和のお雛様では屏風に比べて小さ過ぎて屏風の前に置くとどこにお雛様があるかわからなくなってしまうのですが（笑）、江戸、明治時代のような大きなお人形ならとても素敵だと思います。目賀田種太郎と逸が朝鮮に行つて仕事をしていた時の写真（※9頁等）は大事にとつてあります。

海舟や種太郎やまつわる「家だけに伝わる話」はありますか？

設計の仕事をしていた父が、母親の正代から家の様子を聞いて描いた、明治時代の赤坂の海舟邸の図面があります。そこには手土産のお菓子を仕舞うお菓子部屋がありました。海舟は家にお菓子部屋を持っていました。祖母は夏を過ごす家にも頂きもののお菓子専用の棚を作っていました。

歴史的人物のご子孫であることのプレッシャーはありますか？

先祖たちが一所懸命働いて作り上げた仕事とその評価を傷付け汚すことのないよう、自分を律するというか周囲の目を気にすることはあります。

逆に誇りに感じる場面はどんな時ですか？

海舟も種太郎もその時代の日本のために最善なことは何かを考え、どんな困難があっても信じたことをやり通し、それが結果として日本の将来の発展のために尽くせたことは、子孫として誇りに思います。

今の時代に、海舟や種太郎から学べることは何だと思いますか？

刻苦勉励すれば必ず良い実りを自分だけでなく社会にももたらすことができること、また自らを律し、自分を追い込むほどに努力すれば必ず花を咲かせることができるというのは、今も同じだと思います。

この家系を次の世代にどう伝えていきたいですか？

海舟は旗本の中でも下級の身分でしたが、こつこつ真面目に勉強したことで身を立てました。

現在においても同じと私は思っております。地道にこつこつ勉強をし続け、仕事に励めば、必ず手を差し伸べてくれる人が現れる。贅沢は物品や衣食住ではなく、心の豊かさこそ使うべきとして先祖は生きてきたと思います。

辛い時こそ笑顔を決め、世のため、人のために尽くせば、幸せが向こうから寄ってくる、というような人生を送っていたと思います。

小さいことにくよくよせず、大局を掴んでいければ溺れることはない。

私が先祖の生き方を見て学んだことは、いつの時代でも大切なことだと思ふの



幼少期のみな子氏[前列中央]。右に立つ着物の女性が祖母・正代氏[海舟の孫で目賀田種太郎と逸の三女]。左隣の男性が父・直智氏[海舟の曾孫]。その隣が祖母[父の姉、海舟の曾孫]。(高山みな子氏蔵)



海舟が逸の長女の初節句のために書いた雛屏風。(高山みな子氏蔵)

私は名刺の裏に系図を入れてある。高祖父の勝海舟から私までの説明がややこしいからだ。海舟の三女の三女の長男の長女です。聞いている間に誰もが頭の中でこんがらがる。99%の方が海舟と私の関係にへえ、そうなんです、ね、となるのだが、神奈川県秦野市の「はだの歴史博物館」の館長さんは違った。「え、目賀田種太郎さんのひ孫なんですか。」海舟三女の曾祖母逸のところに伴侶である目賀田種太郎の

名前を入れており、それに反応されたのだ。「秦野は煙草で成長してきたところなので、煙草専売を推奨された目賀田さんの話をぜひ、秦野でしてください。」というありがたい言葉をいただいた。

曾祖父・目賀田種太郎は私にとって遠い存在だった。19歳で政府の支援でハーバード大学へ留学し、帰国して専修大学や現在の東京藝術大学の音楽部の元を作った……親バカの逆で先

祖バカとでも言おうか、優秀すぎて出来ない私など及びもつかない。それくらいの意識しかなかった。

今から40年ほど前、私がちょうど20歳の誕生日を挟んだ期間で小さな旅行雑誌の会社から、アルバイト代は出せないけれど滞在費用は全て会社が持つので、ニューヨークやボストン、ワシントンの取材に行かないか、という声が掛かった。

当時の大学生にとってアメリカは憧れの地、二つ返事で連れていっていただいた。

先祖について何も知らないというのは今から思えば本当に残念なことをした。ワシントンからアナポリスにある海軍兵学校へ取材に行った。

リチャード・ギアの「愛と青春の旅立ち」という映画をご記憶の方もあるかと思うが、とにかく学生がカッコいい。制服姿も素敵なのだが、話していると自分がここで何を学んで将来どういう方向性をもって生きていくかという指針を誰もがしっかり持っていて、ぼんやりした大学生だった私は目を覚まされた。

もし、その時、ここに海舟の長男が留学していたことを知っていたら、もう少し違った話ができただのかもしれない、と今なら思う。

そしてその後、ボストンに行き、ハーバード大学へ見学に行った。学生たちの身なりは質素で、教科書とノートをバンドで結んで足早に歩いていた。当

海舟 逍遥

「かいしゅう しょうよう」



第三回●目賀田種太郎と私

ライター・勝海舟玄孫

高山みな子

家によっては幼少の頃から先祖のことをしつかり教えるところもあるそうだが、私の家系はそうではなかったのだ、勿体無い機会を逃した。

種太郎は逸と結婚する前だが、自分の留学から帰って間もなく、留学生の監督として再びアメリカを訪れている。その時の交流のあった人たちの中に、海舟が可愛がった人の名前が見える。こんなところから種太郎は海舟との縁ができ、逸との出会いになっていくのかなあと想像する。

逸の記録を見ると「父親譲りの女丈夫」という話も出てくるし、私の父は逸は怖いお婆さんで、庭でみんなで遊んでいても逸が縁側に出てくるとうるさい、と叱られるので蜘蛛の子を散らすように逃げたと話していた。そんな気の強い女性と添い遂げられたのも、種太郎だったからかもしれない。

種太郎はハーバード在学中の明治6年、20歳の頃に、人力社という組織の設立に関わっている。「本邦は勿論、



現在のハーバード大学



高山みな子

Kohyama Minako

慶應義塾大学文学部卒業。会社勤務を経て旅行・紀行雑誌、企業広報誌などの執筆活動をしつつ、勝海舟子孫として講演や各種イベントに参加。高知県観光大使、長崎市観光大使、三重県松阪市ブランド大使、東京都港区観光大使を務める。共著に「勝海舟関係写真集」(出版舎 風狂童子)、「日本全国ユニーク個人美術館」「日本全国ユニーク個人文学館・記念館」(新人物往來社)など多数。

主税局長・目賀田種太郎と

「たばこ塩の博物館」を訪ねて

たばこの歴史文化に触れる

幕末の動乱を乗り越え、迎えた明治という新時代。ゼロからの近代国家建設という壮大な理想と困難に直面していた政府の中核を担う大蔵省に明治十六年、目賀田種太郎は入省しました。やがて日本は日清・日露戦争という未曾有の国難に見舞われ、巨額の戦費調達を迫られます。日清戦争の直前に大蔵省主税局長に就任した種太郎は、国家の存亡を懸けた極めて困難な財政戦略に挑むこととなりました。

この未曾有の局面で、種太郎が新たな財源のひとつとして着目したのが「たばこ」でした。種太郎は税制の近代化を強力に推進。国が原料の葉たばこを買い上げ一括管理する「葉煙草専売法」の制定に尽力し、これを実現させました。さらに明治三十七年には、製造から販売までの全てを国が独占する「煙草専売法」を制定。この「専売制」という仕組みは塩、樟脳、樟脳油などへも広がり、戦時下の軍備拡張や社会インフラ整備を支える貴重な原動力となったのです。

こうした激動の歴史と、種太郎が築き上げた専売制の軌跡を今に伝える博物館が、墨田区にあります。大蔵省専売局から日本専売公社を経て受け継がれたJTB（日本たばこ産業株式会社）が運営する「たばこ塩の博物館」です。

館内では、世界各地の希少な喫煙具や、時代を映し出すたばこのパッケージデザインなどが展示され、たばこの文化史を深く学べます。さらに生命に不可欠な塩の役割や日本独自の製塩技術の進化など、塩の科学や歴史についても学ぶことができます。

種太郎が新時代の財源のひとつとして見出した「たばこ」。その歴史を紐解くことで、明治以降の時代の熱量と、種太郎が捧げた情熱が、より立体的に浮かび上がってくるはず。



たばこ塩の博物館 <https://www.tabashio.jp> 墨田区横川 1-16-3 電話▷03-3622-8801(代表)

開館時間▷10時~17時 休館日▷月曜日(月曜が祝日、振替休日の場合は直後の平日)・年末年始



丸花の人気メニュー「カツ丼セット」。甘辛い出汁がしみ込んだカツを、とろりとした卵でふんわり包んだ絶品の一杯。お蕎麦にサラダ、味噌汁、お新香まで付いて、価格はうれしい1,100円。

【蕎麦処 丸花】墨田区江東橋3-6-8 電話:03-3631-4423 <https://maru-hana.jp>
定休日:火曜・祝日／営業時間[平日]11:00~15:00・17:00~20:30 (LO 20:00) [土日]11:00~20:30 (LO 20:00)



海舟の時代を知る、味の継承者

墨田幕末明治グルメ

第三回●蕎麦処 丸花(明治初頭創業)

錦糸町駅からほど近い路地裏に佇む「そば処 丸花」。その創業は明治時代初頭に遡る。初代・甚七は元・川越藩の武士。明治維新で身分を失い、新たな生きる道として選んだのが蕎麦屋であった。「武士の商法」と揶揄されるほど士族の商いは失敗が多かった当時、見事に成功を収め、現在まで続く同店は非常に稀有な存在であり、歴史的価値のある名店といえる。

関東大震災や東京大空襲といった数々の困難に見舞われながらも、焼け跡から鍋を掘り起こし、不屈の精神で紡がれてきた老舗の暖簾。現在は五代目・和宏氏がその重みを受け継いでいる。店名の「丸花」は、蕎麦の花が丸く咲く姿に由来すると伝わる。

老舗でありながら敷居の高さは感じさせず、店内には下町特有の温かで庶民的な空気が漂う。代々伝わる「かえし」と、毎朝手打ちされるコシの強い蕎麦はまさに絶品。蕎麦屋ならではの奥深い出汁が効いた「カツ丼」も人気のメニューである。

「同じ味を続けるためには、同じことをしてはいけない」。そう語る五代目は常に変化する環境や感覚に合わせて、「昨日からの学び」を大切に蕎麦と向き合っている。明治から続く下町の蕎麦屋の歴史は、そんな店主の静かな「信念」によって支えられている。



店内には昔のメニューや写真なども飾られていて、歴史の積み重ねを感じさせる。



山縣が招いた日本警察の父

向島の三田神社には、ドイツの警察大尉ヘーンを顕彰する「普国警察大尉ヘーン君表功碑」が建てられている。ヘーンは明治十八年に来日した「お雇外国人」で、日本に新設された警官練習所の教官として警察幹部の育成に大きく貢献した。さらに余暇を利用して、北海道から沖縄まで全国各地の警察事情を視察して、草創期の日本警察が進むべき方向性を多角的な視点から提言した。これらの内容は「復命書」にまとめられ、後にヘーンは「日本警察の父」と称されるようになった。

明治二十四年に帰国したが、その翌年に死去した。日本では直ちに記念碑建立の機運が高まり、明治二十七年、ヘーンの教え子や上官らの寄付によって建立されたのがこの碑である。碑文



墨田の石碑でめぐる 海舟の筆縁地図 vol.03

墨田区に点在する歴史的な石碑の数々。それらに刻まれた碑文や揮毫を手がけた人物と、勝海舟との知られざる縁を紐解きます。

普国警察大尉ヘーン君表功碑(三田神社)

山縣有朋との縁

いさましき いくさだかな まつろはぬ
かたきをときて はや帰りませ
ほことりて 我つものの 渡るらむ
ありなれ川に 浪たつなゆめ
さして行く 我が日のみはた 朝風に
雲ふき払らふ 高麗のしら山
激励の歌ではあるものの、後に自身で「オレは、山県の出る時に、左様言つてやった。快く一戦して、好加減にして、引上げて来なさい。決して長く戦つてはいけません」と語っているように、日清戦争に反対していた海舟の思いも読み取れる。

山県に至つては、あれは正直一方の男サ。」と語っている。海舟と山縣の接点はそれほど多くないが、明治二十七年九月、日清戦争に第一軍司令官として出征する山縣に、次の歌を添えた手紙を送っている。

「幕末」の終わりを第一線で見届けた海舟は、「藩閥」の終わりが見え始めたこの時代を「閥末」と呼び、さまざまな意見を述べた。しかし、すでに老境に達していた海舟は明治三十二年に死去する。そして山縣は、「閥末」後の時代を担う当事者として、さらに多くの苦勞を重ねていくこととなる。



国会図書館蔵

山縣有朋

天保9年閏4月22日～
大正11年2月1日

吉田松陰の松下村塾に学んだ長州藩士。奇兵隊軍監。維新後、陸軍卿に就任。徴兵令の制定を推進した。第一次伊藤内閣では内務大臣に就任。明治二十二年、内閣総理大臣となる。日清戦争では第一軍司令官、日露戦争時は参謀総長として作戦を指揮。枢密院議長などを務めた。大正以後、元老として、政界に大きな影響力を与えた。大正十一年死去。



監修・森重和雄
古写真研究家・作家

国立大分大学経済学部経済学科卒。株式会社電通映画社(現・電通テック)勤務を経て、写真史家・古写真研究家・作家となる。主な著書に『幕末・明治の写真師列伝』、『幕末明治の写真師 内田九一』、『英傑たちの肖像写真』、『複製版 日清戦況写真』、『大久保家秘蔵写真 大久保利通とその一族』、『下関蓮杖 日本写真の開拓者』、『勝海舟関係写真集』、『坂本龍馬関係写真集』などがある。

万延元年、勝海舟は咸臨丸でアメリカへ渡り、滞在先のサンフランシスコで数枚の写真を撮影している。現在確認されているのは、松岡磐吉・小野友五郎とともに写った写真、伊勢の支援者である竹川竹斎に贈った胸像写真、そして今回紹介する肖像写真(大小二種存在)の、計四種類である。

教科書などでも海舟の肖像として広く知られているのが、この写真だ。この写真には大きいサイズと小さいサイズの二種類が存在する。ティンタイプという焼き増しのできない一点ものの技法で撮影されているため、二枚は完全に同一ではなく、角度などが微妙に異なる別カットとなっている。

第3回 咸臨丸で渡米した際の勝海舟肖像写真 撮影時期:万延元年【撮影者:不明(撮影地:サンフランシスコ)】



明治三十二年刊、『勝海舟』(民友社編)に掲載された海舟の肖像写真。原本は現在、大田区の勝海舟記念館に所蔵されている。

た恋人・梶クマに贈った。その後、写真はクマの姪の家系で大切に受け継がれ、大きい方の写真は勝家を経て、現在は勝海舟記念館に所蔵されている。

実は、この写真には興味深い点がある。記念館の原本写真をよく見ると、海舟の頬のあたりには朱色が差してあるのだ。これは、海舟自身が戯れに彩色したものだと伝えられている。

幕末史を彩る一大事業であったアメリカ航海。その旅で撮影した貴重な写真を、遠く長崎の恋人・クマに贈る際、自ら頬に朱を差すという遊び心を忍ばせた海舟には、どこか人間味あふれる愛嬌が感じられる。

その後、元治元年に軍艦奉行並として長崎を再訪した海舟はクマと再会し、二人の間には後に息子の梶梅太郎が誕生している。日本の未来を見据えた熱い志を宿す眼差しと、遠く離れた恋人へ向けた不器用ながらも温かな愛情表現——。私たちがよく知るあの一枚の写真には、激動の時代を駆け抜けた壮大なロマンとともに、一人の人間としての海舟の素顔が、刻み込まれている。

森重和雄・高山みな子・三澤敏博 共著『勝海舟関係写真集』絶賛発売中!

次号予告 ※特集内容は予告なく変更となる場合がございます。

次号は2026年11月発行予定です

特集 無血開城を成し遂げた墨田出身の二傑 海舟と鉄舟

海舟最大の功績とされる「江戸無血開城」。その歴史的偉業の陰には、海舟と同じく墨田の地に生まれた山岡鉄舟の存在がありました。墨田が生んだ二人の傑物は、いかにして江戸を戦火から救ったのか。それぞれの行動をていねいに追いながら、無血開城における役割に迫ります。さらに、墨田に遺る海舟・鉄舟の知られざる足跡も紹介。乞うご期待！



オリジナル・ピンバッチ プレゼント!!

『海舟とすみだ』では読者の皆さまからのご意見ご感想を募集しています。お送りいただいた方の中から抽選で、オリジナル『勝海舟ピンバッチ』が当たります！ ご応募の際は、住所、氏名を明記の上、下記、編集部まで手紙にてお送り下さい。なお当選者の発表は賞品の発送をもってかえさせていただきます。

応募先 〒130-0013 東京都墨田区錦糸2-8-11 トウダレイビル2F
サンピース・グラフィックス内『海舟とすみだ』編集部

海舟とすみだ

KAISHU to SUMIDA

企画・制作 サンピース・グラフィックス株式会社
デザイン サンピース・グラフィックス株式会社
編集長 三澤敏博
顧問 高山みな子
後援 勝海舟顕彰会

海舟とすみだ 公式サイト
www.katsukaishu.com/magazine



【個人情報取扱（プライバシーポリシー）について】サンピース・グラフィックス株式会社はお客様の個人情報を守ることをお約束いたします。氏名、住所、電話番号、メールアドレスなどのお客様情報を第三者に転売・譲渡したり、開示することは一切致しません。お客様情報を当社業務（発送、連絡、管理等）以外に使用することは一切致しません。万が一その他の用途で使用する必要が生じた場合には、その使用目的を明示した上、必ず該当するお客様の同意を得た上で使用するものといたします。 サンピース・グラフィックス株式会社

企画・制作・デザイン

サンピース・グラフィックス株式会社

〒130-0013 東京都墨田区錦糸2-8-11 トウダレイビル2F

tel ▶ 03-5608-1971 fax ▶ 03-5608-1972 mail ▶ info@sun-piece.com





KANKYOSEIBI
株式会社 環境整備

お店やオフィスの「キレイな環境づくり」をサポートします

<http://kankyoseibi.com>

代表取締役 廣田健史 HIROTA KENSHI [本社]〒130-0003 東京都墨田区横川3-9-3
TEL(03)3829-3611 FAX(03)3829-3887 E-mail: info@kankyoseibi.com
[支店・営業所] 葛飾区宝町・足立区千住桜木・千葉県松戸市 [取扱種目] ●リサイクル全般 ●廃棄物処理 ●貸おしぼり ●リネンサプライ



SUMIDA MAP



墨田区の主な 勝海舟関係史跡と 本号紹介のスポット



P25
たばこと塩の博物館
墨田区横川1-16-3
表紙
法恩寺前
墨田区太平1付近

EVENT INFORMATION

第20回 勝海舟フォーラム2026(第20回)

勝海舟の三女・逸の夫
目賀田種太郎

2026年7月20日(祝日・海の日)

例年と会場が変わります!

【会場】墨田区曳舟文化センター
「京成押上線」又は、「東武スカイツリーライン線」曳舟駅前